

No.108

公民館だより

平成11年10月

宮津市字由良

由良の里センター内

由良地区公民館

大師山(天王山)とお大師さん(2)

公民館長 酒田 治

参道は、海から吹き上げて来る涼しい風が、木々の間を縫い、竹と竹が擦れ合う音が時折ギーと嫌な音をたて、木の葉がカサカサと鳴る。余り気持ちの良い二重奏ではない。

二番目の石仏より少し歩いて、三番目、四番目、五番目とほとんどの石仏が柔和な顔(はつきりと分らないが感じ)が、真新しい涎掛けでお参りの人々を迎えてくれている。又、ほとんどの石仏が坂道のカーブに沿って、右側、左側とに安置されている。その中二体程、夫婦なのか、

恋人同志なのか、身を寄せ合い佇む姿が目を引き、顔より分からないので失礼して涎掛けをチョット捲つて見る。体は、整っている。

参道の途中(頂上近く)私が小学生の頃、下級生や、上級生と遊びに来て、葉の付いた木の枝などで坂滑りを楽しみ、ズボンで泥んこにし親に叱られた事を思い出し、当時が懐かしく甦つて来る。途中、石仏と小学生の頃の思い出を整理するため、少し休憩を取り次に向かう。

参道も上りから下りに向かう。石仏も上がり道と同じように、七m〜十mぐらいの間隔で安置さ

れ姿を見せてくれる。

発行月は分からないが、京都新聞に、夜久野高原の一带に、四国八十八か所大師霊場を移したといわれている八十八の石仏が安置され、巡拝コースになっているという記事が出ていたのを思い出し、大師山の石仏も、夜久野高原のものと繋がりがあ

るのではないかなど関心が高まつて来る。参道は下り道、天王山のお宮を右に見てカーブを曲がると一気に視界が開け、大師山(東側)最後の石仏に又の再会を約して別れを告げる。

帰宅の途中石仏達は... ◎夏の暑い夜、里から聞こえて来る盆踊りの調べに、涎掛けを外し、夜が明けるのも忘れて踊りに興じていたのではないだろうか？

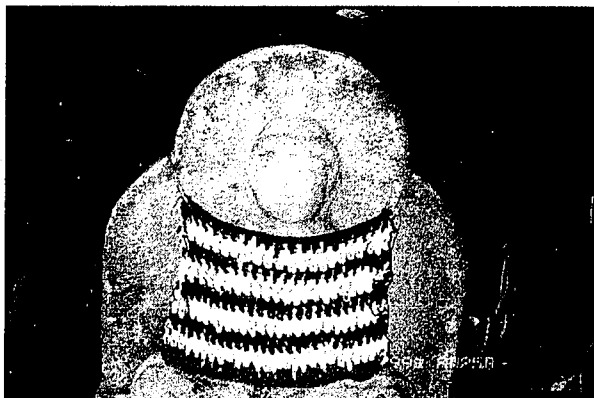
◎秋祭りや、冬、深深と降り積もった雪の日、寒い寒いと言いつら、東山、西山の全員が、天王山のお宮広場に集合して、

チビチビやり乍ら、由良の将来など語り合っていたんではないだろうか？

◎浜野路地区の唯一体の石仏さんは、東側の番人(見張役)だったのだろうか？

◎仲良く並んで安置されている二体程の石仏は？

近代社会に於て考えられない、遠い遠い昔のこと、色々と空想して見るのも何となく別世界に入り込んだようで楽しく、愉快である。



大師山の東側に写真の石仏が43体余り安置されている。

行事報告

主事 飯澤 登志朗

◎五月三日

由良岳登山

恒例の由良岳登山も第三十三回を数えます。当初予定の四月二十九日は前日来の雨で登山道の悪化が心配され、また登山者のなかに幼児も含まれることから延期となり五月三日に実施しました。

四月二十九日にも遠方から参加された人達二十数名が頂上をめざして登られたようですが下山された方に聞きますと「子供たちは無理」とのことでした。五月三日は薄曇り微風の絶好の登山日和となり、柘本さんの指導で準備体操を行った後出発しました。

途中、獣が掘ったものか、人間の仕業でしょうか、スコップで掘ったような穴が目立ちます

がめずらしい草花の盗掘の後であれば哀しい気持ちがあります。

今年、公民館だより一〇七号で紹介しましたように、元主事 故平間克巳さんの「標高六四〇米」のコピーを登山記念として手渡し喜ばれました。

◎六月六日

第十一回宮津市地区対抗

駅伝競争大会

第十一回を迎えた駅伝競争も今年から南部コース、北部コースの交互開催となりました。今年、吉津地区が新しいコースに入った関係で北部コースで開催されました。

練習風景や当日の様子は小学生が書いてくれましたので省略しますが長期間練習に協力いただいた方々やご家族に対しまして心から感謝を申し上げます。

「記録は第三位入賞」

表彰式で宮津市長から「由良地区がしばらく低迷していたが復活されたことを祝福したい、さらなるご健闘を……」と激励を受けました。

来年は南部コースとなり由良スタートとなりますが地元チームに絶大なご声援をお願いいたします。

最後になりましたが活躍された選手団は次の通りです。

「小学生」

- 山田 裕喜 由里慎一郎
- 中西 孝徳 岡田 朋子
- 大畑 麻里 山田久美子
- 「中・高校生」
- 田中 清貴 長尾 明廣
- 岸田 祐佳 酒本美奈子
- 「一般」
- 奥田 政郎 新宮 鶴雄
- 津田 一 田中 昭義
- 中西 一就 千坂 幸雄
- 矢野さゆり 田中 衣里

●表彰 五年連続 田中昭義
区間一位 奥田政郎

◎六月十二日

女子フアミリーバトミントン交流会

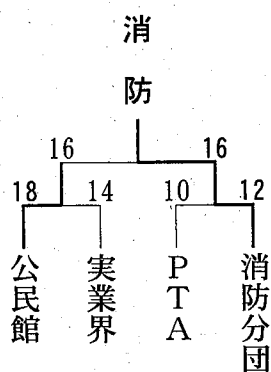
宮津市教育委員会の指導で前年五回講習会を開催してきましたが、その定着とスポーツ振興を併せて交流会を開催しました。

初めての人もあったようですが直ぐに馴れ明るい声が飛び交う一日でした。

この運動は名前のおり家族で楽しめるよう考案されたもので気軽に参加できるものです。

◎六月十三日

団体ソフトボール大会



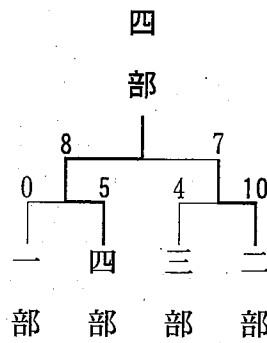
優勝戦は同点のため抽選により消防分団と決定しました。ご協力くださいました各団体にお礼を申し上げます。

◎八月十四日

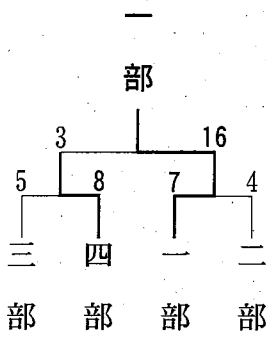
四部対抗球技大会

早朝来の降雨で開会が危ぶまれましたがグラウンド状態は良好であり強行しました。途中降雨で中断する場面もありましたが選手の皆さんの熱意で天候も回復し無事終了することが出来ました。

(野球)



(ソフトボール)



野球優勝戦は最終回七回裏四点差を追いかける四部が執念をみせ一挙五点を入れて逆転さよなら勝ちでした。久し振

りに優勝をと健闘した二部の戦い振りも立派でしたが、それを上回る四部の底力を観た感が強く残る一戦でした。

ソフトボールは一部が三年連続で優勝しました。投手高田さんの活躍が大きな要因でしょう。

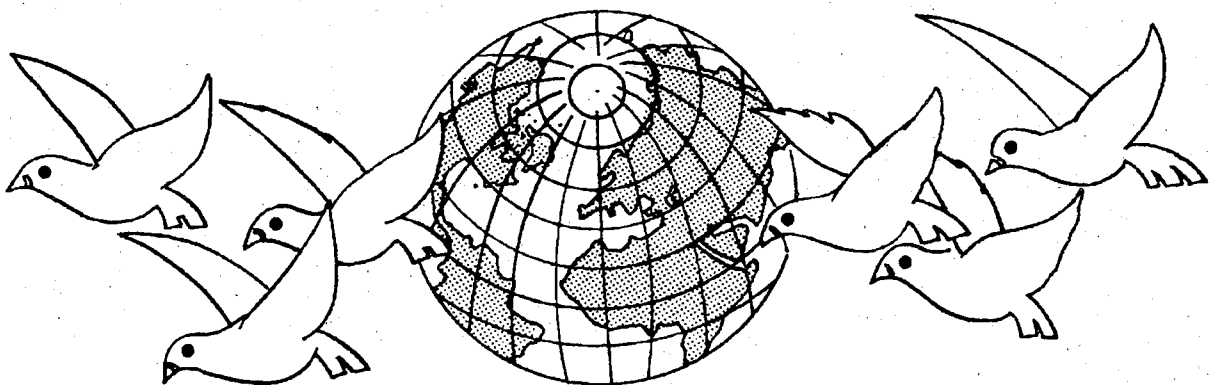
◎八月十四日

盆踊り大会

やゝ風の強い日となりましたが今年は踊りに加えて綿菓子コーナー、ヨーヨーつりコーナーを設け家族での参加を呼びかけました。

子供たちの元気な声、笑顔が一杯いで各コーナーとも大忙しの盛況に文化部員一同この企画に自信を得た一夜でした。

郷土芸能の保存育成と夏の夜の楽しい思い出づくりに更なる企画をもつて頑張つていきます。



みんなちがつて、みんないい

由良小学校 校長 水谷洋子

わたしが両手をひろげても、
お空はちつともとばないが、

とべる小鳥はわたしのよう

地面(しべた)をはやく走れな

い。

わたしがからだをゆすつても

きれいな音はでないけど、

あの鳴るすずはわたしのよう

たくさんうたは知らないよ。

すずと、小鳥と、それからわた

し、

みんなちがつて、みんないい。

これは、夭折した詩人金子み

すずの「わたしと小鳥とすずと」

の詩です。

この詩をはじめて目にした時

金子みすずの感性の純粹さと柔

軟さに、心を打たれました。

それと同時に、このような視

点で物事をとらえる感性を養い

柔軟な視点で物事をとらえたい
と思いました。

以前に聞いた講演の中で、子

どもが、家族からの言葉で、

「心がほつとすること」と「心

が傷つくこと」のアンケートの

結果を聞いた事があります。

「心がほつとすること」は

●話を全部聞いてくれること

●よくがんばったね

●いつも味方だからね

●よくできたね

●大丈夫、あんたはえらいから

●「おかえり」というお母さん

の温かい言葉

等であり、反対に、

「心が傷つくこと」は、

●兄弟で比べられる

●何をしても無理

●誰に似たのかな

●お前なんか生みたくて生んだ
んじゃない

●家族の一員ではない。出てい

け

●あんた智恵遅れとちがう

というような言葉でした。

家庭の機能の中に、家庭は、

教育の出発点であり、善悪の判

断力を培ったり、基本的な生活

習慣を身に付けさせるとともに

「やすらぎの場」としての大

きなはたらきがあります。

その家庭で、子どもたちは、

家族からの言葉で、このように

感じていることがわかります。

そういえば、私は、昨年亡く

なった母から、子どもの頃、

「あんたは、宿題をするのが

はやいなあ。」

「器用に作るなあ。」

などと言われて、また言っ

て、そのように行動したこ

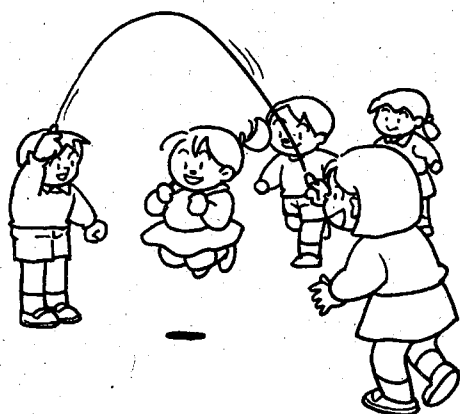
とを覚えていきます。今、思えば

大したことがなくても、うまく

のせられたのかもしれない。

一人一人の子は皆、違ってい

ます。その子なりの良さを見つ
け、ほめて、自信を持たせ、伸
ばしていくことが、親として教
師として大人としての大きな務
めであると思います。その子な
りの良さをみつけ自信を持た
せ、伸ばしていきましょう。



三位になったたえきでん大会

中西 孝 徳

ぼくはほけつです。

山田君のほけつです。

練習にもさんかして走りま
した。先生は奥田先生です。

ものすごい速いです。

毎日練習していて、何だか自
んがついてきました。ぼくは駅
伝にでるのが楽しみでした。

でもほけつでした。

奥田先生にきたえてもらっ
たからすごく速くなった気が
しました。

駅伝にはでられませんでし
たが、ごはんも、うどんも、み
そしるものめておいしかった
です。

三位になったからたいのさ
しみがさとセンターにありま
した。

すごすごうかでした、すごご
こりこりしていておいしかっ



たです。

またさんかして、ほけつでもい
いから三位になって、たいがく
たいです。

こんどはアワビが食べたいな。
それとステーキも食べたいです。
でも、一度は選手として出て活
くしたいです。

苦しかった。でも

やりきったぼくをほめる。

山田 裕 喜

「よし今年もがん張るぞ」

六月六日、今日は駅伝大会の
日です。

去年とは全くちがいで奥田さん
がコーチで五月の始めから、六
月の始めまで約一ヶ月練習しま
した。その間、いやになつたり
したこともままあつたけどがん
張りきることが出来ました。

奥田さんから一区を走るよう
言われた時、ぼくがおそかつた
ら由良がだめになつてしまうと
いう不安で頭一ぱいになり一区
の大切さを思いましたが、反面
自分を色々な面でためすチャン
スだと思いました。

奥田さんのアドバイスをうけ
日ヶ谷小学校のグラウンドを調子
を見ながらしっかりウォーミン
グアップをして、いつでもス
タートができるようにしまし

た。

そして、とうとう時間が来た
ので、スタート場所に向かいま
した。何も頭の中にはありませ
んでした。

「いちについて、ドン。」

はじめは、ついていくのが
やつとでした。思いの外、他の
人は最初からスピードをあげ、
ぼくはピリ、あせりすぎて自分
を見失わない様にしなければ。
坂道に入り何人かぬぎ、たすき
をわたす時には三位でした。一
位の人が目の前だったのでぐや
しかったです。

でも、本当は駅伝大会に出ら
れてよかったです。自分の力を
ためせたし、こんな機会をあた
えてくれた人たちに感謝してい
ます。

長かったようであまり短い駅伝大会

由利 慎一郎

「ドクドクドクドクドク。」

ぼくは、心臓が飛び出そうだった。特にくるのをまつている時なんかは死にそうだった。

そして、

「きた。」

ぼくは、なにがなんだかわからなくなってしまう。

前の人もだいたい差があった。

「よしがんばるぞ。」

ぼくは自分に言いかけた。

「うしろの人には、ぬかれないぞ。」

ぼくは、走りだした。

走っていると中に妹たちがいた。応援に来ていた。

応援されると力がもつとでるようになった。

知らない人もいっぱい応援してくれた。

ぼくは、すぐうれしかった。

走っている時練習のことも思い出した。

きびしい時、いろんな事を考えた。

「ハアハア。」

だいぶつかれはじめた。

それもそうだ。二三日前までかぜをひいていたのだ。

もうぼくは自分とのたたかいになった。

と中とまりそうな時もあった。そして、とうとうゴールした。

「ハアハアあーつかれた。」

そして、由良は、三位に入った。「ヤッター。」

ぼくは、とてもうれしかった。なんか、長かったようであまり短かった。

駅伝

岡田 朋子

六月六日、わたしのむねは高鳴った。今まで練習のことを思うといくらか楽になった。なぜなら一日に一度しか走らなくていいから。それに、練習は同じ所を何回もぐるぐる回るからちよつと長く感じるからだ。

わたしは、ウォーミングアップをする間に友達をつくらうと思った。だけど、中々声をかけられなくて結きよくだめだった。そして、いよいよわたしの出番が来た。たすきをもらいかけた。そして、せ中に、多くの人の声援を感じる。わたしは、絶対に一人はぬかす!と思っていた。そして、ぬいた。

けど、またちがう人にぬかされた。ちようどコースの半分くらいまで走ると、少し息がみだれ

てきた。すると、姉がわたしに、

「朋子。がんばれ!。」

と大きな声で言っているではないか。わたしは、その声のおかげで立ち直れた。そして、心も落ちついた。「前を向いて、せい

いっばい力を出しつくそう。」

と思った。やがて、そう思って走っていたら、たすきをわたす人が見えてきた。ラストスパ

トになると全力を出した。

「バシッ。」

たすきをわたした。つかれたけど、気持ちがすつきりして気持ちよかった。三位になれたこともうれしかったけど、それより自分自身が走りきれたことの方がうれしかった。



駅伝大会

大畑 麻里

わたしは、駅伝大会の選手で出ました。

わたしは、毎日毎日グラウンドへ行つて練習しました。

そして駅伝大会の日になりました。すごくドキドキしていました。わたしは、九区を走りまわりました。バスに乗って走る所へ着き、外へ出てあたりを見ると母と父と弟が見に来てくれました。わたしはうれしかったです。どんどん時間がせまってきました。わたしは、何位かなと心配でした。

わたしは、いままでの練習のせいかが出せるように願いながらくるのを待ちました。

そしてきました。でもきたのは、栗田でした。そしてついに二位で由良がきました。わたしは、たすきをもらおうとがんばつ

て走り始めました。走っていると町の人たちが温かく応援してくれました。

みんなが、

「ガンバレー。」

と言つてくれるだけで元気がわいてきました。一生懸命走りまわりました。わたしは、みんなががんばつてここまでつないできてくれたことを思つて本当にがんばりました。

そしてついに次の人が見えてきてわたしました。わたしは、ほつとしました。終わるとすごくえらかったです。みんなの応援もうれしかったです。

そして由良チームは、三位になりました。銅メダルです。一人ずつもらえました。すごくうれしかったです。本当に出てよかったです。

お兄ちゃんのおかげ

山田 久美子

五月の初め、お兄ちゃんは、駅伝のせん手にたのまれました。

初めての練習の日、

「久美子も来るか」

と言つてくれたので、ただ見るつもりで小学校までついていったのですが、お兄ちゃんが何かとても速く見えてきて、どれくらいついて走れるのかためしてみたくなってきました。

ぜんぜん相手になりませんでした。したが、何日かたつと、とても楽しく思えて、けつきよくほとんどの日練習に行つてしまいました。そして、ほけつにえらばれてしまいました。

し走やげきれいな会にもみんなといっしょに行くこともできました。うれしかったのですが、六月六日は、お兄ちゃんと八時に



里センターへ集まって、マイクロボスの出発の時間になつても女子のせん手の二人が来なかつたので、「わたしが走ることにでもなつたらどうしよう。」と思いかけた時に二人が見えて、「ホッ。」としました。
「わたしはほけつだぞ。」と思ひました。
終わつてみると、一カ月ほどの練習の行き帰りも楽しかったし、由良は三位だったので、メダルをもらい、とてもよかつたと思ひます。

川柳

みやげもの 積みだけ乗せての 帰省かな

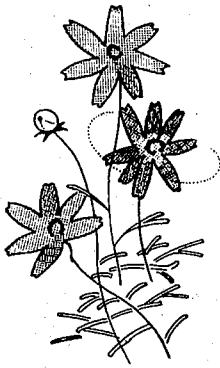
山下 節子

子等つどい 休むひまなし 多忙盆

坂本 妙子

それぞれの 痛み隠して 輪を作る

削り取られ 山は素肌を 恥じている



短歌

薄墨の毛なみやわらかくわが膝にさくらと名付けし拾い猫おり

大森 満喜子

さわさわとトウモロコシの葉はゆれて収穫近き吾の菜園

頂きし子熊の風鈴軒に下げ川風うけて静かな音色

玉垣 まき

半世紀前の我が家を揺るがせり夫出征の報せ来りて

苦しみを秘めて穏やかに出で征きし夫の姿よ 六人の子よ

征きて還らぬ夫の五十回忌に集いたる子ら壮齡の父母となりたり

藤本史代

ときじくの藤のむらさき小紫思いのこせし夢の幾許

朝霧橋渡る身を吹く宇治川の風は遠世の夢吹き返す

水無月の宇治の流れに架けわたすわが幻想の夢の浮橋

山田よしの

うつりゆく四季折々の山眺め健康目指して歩く一万歩

十五夜の月は真赤に美しく冬の川面に映えて昇れり

由良川に色とりどりのサーフィンの朝風に走る姿楽しき

山口美子

大島の着物なつかし我が亡母のふりむく笑顔今ははるかに

野良仕事終えてぬぎたるゴム手より地面におちぬ我が汗のしずく

山の端が暮れゆく時は淋しかり犬に語りぬ過ぎさりし日日



由良に住んで四十年 思い出すままに(三)

四方 寿 朗

公民館長を拝命

先にも書いた通り昭和四十年頃までは、今と違って舞鶴などの病院へ入院するのは大変な事だった。当時は病気の如何を問わず人生の最後は、由良の自宅で家族に見守られながらというのが普通だった。従って現在の老人の長期の入院や老人ホームへの入所は、当時は私が往診で肩代わりしていたことになる。又、各家に自家用車など無かったので、小児の発熱も外の風に当たって肺炎にでもなったら大変というので、殆ど私の往診となった。その上お産の入院が年に三十〜四十人、虫垂炎などの小手術が月三〜四人はあり、私の本職も今より随分忙しかった。

昭和四十一年四月、私に由良

の公民館長への就任要請があった。前任者の岸田六右衛門氏(上石浦)が消防分団長になられるのでその後任にどうかという話。「此処へ住んで日も浅く

由良の事は何も分からない」と尻込みする私に「知らぬ方がよいかは是非」と当時の自治連合会長の中西孫兵衛氏に勧められた。父が永く小学校へ奉職していたこと。また、私は人の健康には薬よりも日常生活の在り方が大切だとの考えから、社会教育に強い関心があったのと、井土巖がしばらく公民館長をしていたのを見ていたことなどもあつて、無鉄砲にもお引き受けすることにした。但し不慣れな私のために、それまで浜野路自治会長をしておられた大森金蔵氏(秀朗氏のご尊父)に副館長

になつていただいた。同氏は當時すでに由良自治会の長老で、他人がどうであれ、ご自分の信念を曲げる方ではなかった。幸い私もよく似た考えで、何かにつけて大いに助けていただいた。以後毎日の診療のかたわら公民館活動という、これまでに無い忙しい生活が始まった。

時間厳守規約

早速年度始めの各種団体の会合に出席する。ところが開会の時間がなかなか守られない。「定刻が過ぎましたが〇〇さんがまだお見えになりません。今電話をしましたのでもう暫くお待ちください」その後「すみません忘れていました」と上座の偉い人が来られてやっと会が始まる。

当時由良では新生活運動推進という事で

- 一、時間厳守
- 一、仏事の簡素化
- 一、見舞い返し of 全廃

の三項目が掲げられていたが、どれも実行は十分とは言えなかった。そこで私は公民館で次のような規約をつくり六月一日より実施することにした。

由良地区公民館時間厳守規約
第一条 由良地区の各種団体役員会、若しくは各個人あてに

文書で案内を受けた会合では開会時刻を厳守する。

第二条 止むを得ず欠席または遅刻する場合には必ず開会時刻迄に何らかの方法でその旨会長に届け出る。

第三条 会長は必ず定刻に開会し、直ちに欠席を取り、無届欠席、無届遅刻者を確認し、その氏名を記録しておく。後日公民館の求めに応じ、その氏名を公民館長まで報告する。

第四条 開会の時刻は、季節その会合の性質等を考慮して無理のない時刻とし、案内状には必ず議題と閉会予定時刻を明記する。

第五条 誤れる温情にもとずき

開会時刻を遅らせたたり、公民館長への報告を偽った会長には、金一封の抛出を求め、公民館運営費に当てる。

第六条 本規約第一条に定める以外の会合においても本規約の主旨に基づき時間厳守を励行する。

第七条 本規約は昭和四十一年六月一日より実施し、公民館長が変更、若しくは中止の通知を出さない限り、徹底的に実行する。 以上

早速ガリ版印刷で各戸に一枚ずつ配布した。又、当時由良小学校に勤務しておられた松本師正先生に『時間厳守』と揮毫いただき、井之本桂先生(両先生はいずれも後に校長として由良小学校へ再赴任された)にB4版縦長二分の一の大きさに、ガリ版のつぶしの技法で赤色で印刷していただいた。それを学校や公民館、掲示板など、由良地区内の公共の施設に張りまくった。余談ながら井之

本先生は京都の学生時代プロの印刷屋で修行され、独特の几帳面な字で多くの文書を作っていた。当時、公民館活動などにもご指導いただいた。今日のようにワープロもコピー機もない当時は、素人の印刷といえば唯一ガリ版だった。宮津市の教育委員会で、井之本先生を講師に講演会が開かれ私も受講した。しかし字が下手であわて者の私には細かい仕事は無理だった。特に鉄筆で原紙を切るのが最もむづかしかった。筆圧が弱いと字が出ない、強過ぎると原紙が破れて駄目。年三回発行の「公民館だより」も最初は上田照子先生にお願いしていたが、何でも自分でやってみたい私は無謀にも原紙切りに挑戦した。各戸配布で四百五十部印刷となると、途中で原紙が破れることも度々あり、しかもはじめは一枚一枚ゴムローラーを転がしての印刷だった。途中から郵便局の回転式の機械を借りたおかげで印刷は早くなったが、反面難点も

出、公民館教養部は苦勞の連続だった。挙げ句に出来上がった「公民館だより」は読みづらく、地区の皆さんに大変ご迷惑をお掛けした。因に昭和四十一年度由良公民館予算の総額は十五万円、その内公民館だよりの経費は二千五百円弱であった。

砂糖二袋を限度とする。これは大体守られている模様しかし次の
一、見舞返しの全廃
はどうか、生活が厳しかった三十年前と違って「個人の自由な裁量に任せるべき」という意見も無視できない。

新生活運動と言われたこの二つの項目は、要するに形式だけの無駄な出費はお互いに慎しんで、住みよい由良地区になるよう皆で力を合わせて努力しようとの主旨である。今後とも時代の流れを考えながら対処していくべきだと思う。

話を元へもどして時間厳守規約は、初めの頃は「四方先生に叱られるので始めます」などと司会者に時には皮肉を言われたが、皆さんの絶大なご協力と比較的によく守られ今日に及んでいる。これも開会が度々遅れるから、遅く来る人ができるので、会が必ず定刻に始まると決つていれば、時間は自然に守られるのだと思う。この規約は今も発足当時のまま厳然と生きています。引き続き是非守って行つてほしい。

その他の申し合わせ事項のうち仏事の簡素化は
一、葬式、忌明け、初七日の行事は当日限りとする。焼き物は

公民館だより

公民館だよりとは、公民館の活動や行事、地域の情報などを伝えるための広報誌です。毎月発行されています。

発行所：由良公民館

編集者：公民館職員

印刷所：由良印刷

発行日：毎月10日

発行部数：100部

発行時間：毎月10日午後2時から午後4時

発行場所：由良公民館

発行料金：無料

発行対象：公民館会員、地域住民

発行趣旨：公民館の活動を広く知らせ、地域住民の交流を促進すること。

発行内容：公民館の活動報告、地域の情報、公民館の案内など。

発行方法：公民館で受け取り、郵送でも受け取れます。

発行問い合わせ先：由良公民館 電話：0942-22-1111

花遊行

中西夏江

「わたしは植えてみましたんや。」と優しい笑顔で仰有った

汐汲苑の故中西ユキ工様。

あれから何年になるだろうか。今夏も由良浜の一隅に「はまゆう」の白い花が咲き揃って美しく風に揺れている。

み熊野の浦の濱木綿百重なす

心は念へど直に逢はぬかも

柿本人麻呂

この万葉歌一首の歌意は、熊野の浦の濱木綿は、葉が幾重にも重なり合っているが、そのように私はあなたのことを幾重にも心で思っている、直接に逢う機会がないのが残念なことです。熊野は紀伊半島一帯。「はまゆう」は、葉の内部が白く木綿を連想させるのでその名がある。現代かな遣いでは、「はまゆう」で、常緑の葉が万年青に

似ているので「浜万年青」ともいう。

何十年も前に私は南紀白浜で実に見事な「はまゆう」の群生をみて、温暖地はいいなあと思ひました。その「はまゆう」が降雪の丹後由良浜に育つなんて思いがけないことである。

思えば、昭和初期から二十年頃にかけて、現在の中央海水浴場から東部、河口よりの砂浜には、たくさんのお浜植物が旺盛に生育していた。

はまえんどう（赤紫色の蝶形の花）・はまにがな（黄色い頭状花）・はまぼつす（白色の小花の多い総状花穂）・はまごう（紫色で唇形の花）・はまなす・はまひるがお・はまぼうふう・こうぼうむぎ等々……

昭和三十年前後には、以前の繁殖ぶりは見られなくなった。

（踏みにじられたり、採集されたり、水害などで）その後、護岸工事等で、種類は激減してしまつた。止むを得ないことであるが、浜辺は殺風景な余白を残したまま、次の世紀へと移行する。

今、僅かに残つた「はまぼうふう」を愛おしみたい。「はまひるがお」と「こうぼうむぎ」は健在で、「はまなす」は整備された遊歩道に植えられ、そして前述の「はまゆう」が、一郷土人の好情に支えられて凛と咲いている。

折角の佳い浜辺に海浜植物の存在感は薄い。広く植物離れた夏のお浜に「はまゆう」は貴重で大きな意味がある。何とか増やすことが出来ないものだろうか——と甘い先行き期待感をもちながら、傘状に咲き出す白い花びらが錨のように外側に開いて芳香を漂わせる「はまゆう」の夕風に魅せられている。

夾竹桃海の育てし雲若く

西野洋司

盛夏の由良駅下りプラットホームには、夾竹桃の大樹が紅色花をむらがり咲かせて年々、人を仰がせる。過日、来由した女性達が「こんな見事な大木！」と觀賞していた。

由良駅創業以来ずっと、この常緑灌木は、往く人、来る人を見守つて来たのだ。

沙羅の花捨身の落花惜しみなし
石田波卿

「さら」は「夏椿」の俗稱。椿によく似た白色の一日花である。

松原寺に六月から七月にかけて清楚に咲き、そして散る。

……このゆゑに、維摩大士は玉体を方丈に疾ましめ、釈迦能仁は金容を雙樹に掩したまへり
山上憶良

……歌意はへ……それ故に維摩大士は尊い体を方丈のへやに横たえられたし、釈迦如来は貴いお

姿を沙羅双樹の中にお隠しになられた……)という天平五年(七三三) 憶良七四歳の大作の一部である。「金容」は釈迦の姿の尊稱。「さうじゆ」はサラソウジユで、インドの原産。

松原寺のご住職からある機会に、次のような話をおききました。(釈迦がインドのクシナガラ城外の河畔で涅槃に入られた時、周囲にあったという八本の沙羅樹が、釈迦入滅の時には、悲しみのあまり、四本が萎えた。あとの四本は、釈迦の悟りを伝える為に残り、花を咲かせ続けた。

今日、葬式の際に「四花」を作り、死者を送る花となつてゐるのは、こうしたこと由来している。

〔平家物語〕に「祇園精舎の鐘の声……沙羅雙樹の花の色……」と出て来る「祇園精舎」は、釈尊の説法の多くがここでなされたことを引いている。

真実、心に沁みる沙羅の花に、

来年もしずかに向き合いたい。

寄せ笛に巢鳥はひそむえこの花 水原秋桜子

初夏、由良の里センター駐車場に咲く星形の白い小花「えい」。しなやかな枝先に下垂して咲く花達は愛らしい。

その昔、大伴家持がこの花の満開の頃、妻と朝に夕に、時にはほえみ、時にまじめな顔で言い交したという万葉歌がある。「……笑みみ笑ますも……」と夫婦に喜びも困難もあることを詠んでいて興味が深い。万葉歌には「知左」「山治左」という呼び名でよく出ている。

由良は花の多い土地だと思ふ。個々の家々に、公の場所に眺められる花達の何と優しく懐かしく咲いていることだろう。

明るさの彼岸桜や人持ます

山口草堂

かつて北前船の由良の船頭達は、

由良山に咲く彼岸桜を「出船桜」と呼んでこの時期に出航していった。「出船桜」は、この由良で初めて生まれた言葉ではなからうか——と私は鼻屑目で、先人達の風流に拍手を送りたくなる。

いやはてに鬱金ざくらのかなしみのちりそめぬれば五月はきたる 北原白秋

ほのかに黄色を帯びた緑白色の軽やかな重ねの八重咲きの花、この鬱金は、国民宿舎丹後由良荘に咲く。四月下旬の、丁度如意寺の大師祭の頃が満開。前掲の歌は、白秋二四歳の切実な愛、ロマンを「かなしみ」と詠んでいる。愛には、いつか別れのかなしみが来るゆえに——。

花の下片手あづけて片手冷ゆ 鈴木栄子

片手を差しのべたいと思ふ私の相手は安寿。港の児童公園に三月下旬、ワインレッドの緋寒桜が咲く。安寿を祀る北野御膳

宮の境内である。うつむきにしおらしく咲き紅紫色の小花達を夕日の中に眺めるのも一興。先年ためらわず落花を拾って浮花にしたのは、説経節の安寿に対する私の愛執だったろうか。

ともあれ、「花」は古来からさまざまな形で私たちの生活とかわりあいながら生きて来た。

花に会う愉しさは、風にそよぎ、陽の匂いをもつ野草の花もまた然り。

人はこの現世から永遠の訣別をする時、花々に包まれて異界へと旅立つ。戸惑うことは何もない、花の高貴さと花の力がさまざまな回想を愛唱しながら死者を見送ってくれる。

明日ゆく道のどこかに花は咲き、問いも応えもしないけれど、私達に存命の有難さを感じさせてくれるのではなからうか。

一九九九年八月連日猛暑

●参考資料 俳句歳時記・牧野日本植物図鑑・万葉花・やまと花萬葉

由良カメラクラブ

中西 衛

昭和56年5月22日に8名の会

員にて発足しました。最初のうちは四方先生のお宅で毎月の例会をやっておりますが、現在は中西俊夫さんの習字教室にて毎月18日午後7時半より集まっています。各々作品を持ち寄って、皆で観賞し合って色々話し合い、楽しい一時を過ごしています。

年一回の一泊撮影旅行と新年宴会を行っています。これまで旅行先は、昭和57年は琵琶湖方面、昭和58年は丹後半島、昭和62年は北陸方面、平成2年は山陰方面、平成3年は奈良、平成4年は彦根、篠山、平成5年は城崎方面、平成8年は伊根、平成9年は小豆島、平成10年は白川郷と数多く行きました。新年会は、国民宿舎、芳月、松風、川幸、汐汲苑、いそ善等で毎年

やっています。

昭和63年には中西敏雄さん、平成8年には玉垣勇治さんと二名の方が死去されました。お二人共熱心な会員さんで、色々な事が思い出されます。現在の会員は、中西健之上さん、四方寿朗先生、坂本同さん、中西俊夫さん、新宮義男さん、中西寿一さん、大森純孝さん、中西六右衛門さん、私、の9名です。

最近では四方先生のフランス旅行のスライド、六右衛門さんの花の写真、俊夫さんの花の写真、寿一さんの花の写真、健之上さんの風景写真等を見せてもらいました。私は芸術写真までに行けず、もっぱら子供の写真好かりです。

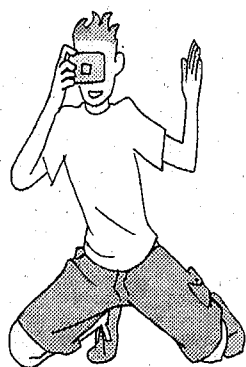
15年程前、四方先生と俊夫さん私の三人で、夜由良岳へ登り

夜明けの由良を写しました。9月ごろでしたが、草で道が見えず足が滑り、大変苦労して頂上に立ちました。朝になり夜が明け始めるとアレヨアレヨという間に陽が昇り、撮影にフィルム交換に大変忙しかったものです。又昭和59年秋と昭和60年春に、四方先生と二人でセスナに乗り、八尾飛行場より由良上空まで30分間飛び、綾部、福知山、舞鶴、宮津、由良上空で1時間半写真を撮りました。小さな窓を開け50分の1位のシャッタースピードでとりましたが、手が冷たくなりました。又冠島まで10分位かけて飛び、お島こ島さんを写しました。昭和47年、私の母校の綾部小学校が全焼した時、必死になって写真を撮りました。私の自慢の一つです。昭和30年代には、マミヤの蛇腹のカメラやリコーフレックスなど二眼レフの6×6判で写し、昭和40年位にミノルタSRIの一眼レフを始めて自力で購入し、

昭和四十三年にミノルタSRT101を買い、昭和49年にニコンF2フォトミックII.2レンズ付を買い、最近ではニコン501オートフォーカスばかりで写しています。

月一回の例会では、林兵衛さんの奥様より自家製のお菓子を出していただいたり、又写真談議だけでなく、色々な四方山話をしたり、和気あいあいの雰囲気です。風景写真の撮り方、マクロレンズでの撮り方、水の流れ、花火の撮り方等色々教えてもらいます。

月日は早く過ぎてしまいますが、写真は、一瞬を写し永くそれを残します。誠にいい趣味だな、と自画自賛しております。由良の方でカメラクラブ入会希望の人は、何時でも結構ですので、ご入会して下さい。



誰か故郷を想わざる

「東京丹後由良会」のことなど

山下 邦雄

記憶といものは、不思議なもので上京して四十六年も経ましたのに、故郷ふるさとでの幼年時代のことことがまるで昨日のことのように思われます。

室生犀生は「ふるさとは遠きにありて思ふもの／そして悲しくうたふもの」と故郷から疎外されながら愛憎の入りまじった複雑な心のうちをうたいました。

が、人には誰もが生れ育った故郷が、唱歌「故郷ふるさと」の歌のようにわすれがたくなつかしいもの、と私は思います。

この気持ちは、故郷を遠く離れるほど、また年を重ねるほどいつそう深くなるようです。

「東京丹後由良会」は、由良出身者約五十名のまさに「ふるさと」なつかし仲よしの会会です。

十数年前に再出発したもので坂本幸彦君が世話役として努力してくれています。

由良会の開催は二年に一度でしたが、昨年より皆の希望で毎年開くことになりました。初めの頃は、大正から昭和初期生れの先輩の出席がありました。が、このころ昭和十年前後から二十五年生れの人がほとんどで毎回十数名で楽しくやっています。

若い人にもつと参加をと思いますが、時には思いがけない人、同級生の弟さんや知人の息子さん、学童疎開で由良の学校で学んだ、という人に会う喜びがあります。お互いに盃を交わし、由良弁丸出して由良今昔の話など恩師や友人の消息、世間話など数十年の時空を超えて、皆に故郷がよみがえります。

それは美しい大自然と温かい情に満ちた由良の地に生れたことへの感謝と、今年も同郷の人と会えた喜びを身にしみて感じるひととき一時でもあります。

望郷の思いが高まるときまつて歌になります。「由良小学校校歌」「故郷ふるさと」「誰か故郷を想わざる」……。数年前には松井小枝（旧姓小室）さんのオルガンで合唱しました。それぞれがさまさまな思いをこめて歌ったことでした。

今年第九回目の由良会は、九月十一日、東京滝の川の居酒屋その名も「丹後宮津」で開きます。宮津出の大將が、由良の酒「白嶺」と丹後山海の珍味でもてなしてくれます。美酒に酔い、語り合い元氣を出したい、年に一度の出会いを大事にしたいものと念じております。

李白は「静夜せいやの思おもひ」の中で「頭こぶしを挙げて山月を望み／頭を低れて故郷を思ふ」と詠んでいます。

私は広報紙「みやづ」を拝読させていただき、過疎化・高齢化の中で、それぞれの仕事に黙々と携わって故郷を守っていただく郷里の方々にいつも感謝の念を抱きます。東京丹後由良会の面々も同じ気持ちです。遥かに皆さまのご健勝をお祈りいたします。



絵本の読み聞かせ!

——こころのひろがり——

いのちをどう育てるか。

いのちの尊さ、いのちの大切さという言い古された言葉は、どういふことなのでしょう。

人の命が衝動的にあまりにもあつけなく奪われ踏みにじられてしまう昨今です。人の痛みがまつたく無視されています。どうしてこうなったのでしょうか。

最近のテレビドラマには何々殺人事件といったタイトルの何と多いこと、殺人のシーンがこれでもかこれでもかとする者の心に、またイメージに刷り込まれることがどういふ働きかたをするか、このことは子ども達の心に残るはず。

また、最近ある市立図書館で読まれた一般向の文学図書の本、スト二十のうちの十冊ほどはなにに殺人事件といった推理も

のが多くこのような読書傾向は何を意味しているのでしょうか。読書は個人の問題ですからとやかく言うことは出来ませんがいささか不気味です。

人間にとつて大切な言葉の世界までも暴力や金という、言葉を否定するもの、ことばを必要としないものの力におしきられたのかとも思います。

“人殺し”というギクツとするのに、殺人ときいてもなまなましさを感ぜられないのも言葉の不思議なトリックでしょうか。殺人とか破壊が意識のなかに毎日のように焼き付けられる、この結果は人間の意識や無意識にどう影響をあたえるのか不気味です。

このような世相の中で、人をささえ、生かす力を成長過程の

子どもたちに身につけさせるにはどうすればいいのでしょうか。

人として生きていくことへの喜びと、意欲を子どもの中に育てるには何をすればよいのでしょうか。

異状の日常化は、なんとしても異状です。

このような日々の中で私たちは大切な感情をすりへらしているように思います。

自然や人に対する思いや、それを見つめる目を育てることを忘れていくように思うのですが、そうした大人の生きる姿はストレートに子どもに反映します。

大人は子どもの生活のモデルであり、大人の姿を映しだす鏡だと思えます。子どもたちに、いのちを実感させるには、まず大人、とくにお母さんとお父さんがあらためて“いのち”の大切さを実感することだと思えます。

そして、お母さんお父さんにとつて実感できるいのちとは、さすかった目の前のわが子です。

私たちは、立ちどまつてわが子を見つめ、いのちとは何か、子どもが生れてくる不思議なとなみに目を向けていきたいと思えます。

そのことを、ときあかしてくれる一冊の絵本があります。

アメリカのマリー・ホール・エツソさんが書いた「あかちゃんのはなし」という絵本ですが、人間の力と自然の力が調和して、いのちの誕生する様をこれ以上美しく描くことはできまいと思えます。

いのちの誕生が力と喜びにみちていることを実に優しく静かに語っています。

エツソの絵本は、近頃のただかわいくて饒舌な絵本とは対照的に、とても静かで寡黙とさえおもえる世界が表現されています。さし絵も多くが墨一色で描

かれています。彩色のさし絵もごく淡い色で描かれています。

エッソの世界は、子どもの成長するうえで現実の生活では経験できない喜びを感じさせ、大きくなったあとまで心に残り人間と自然とに対する豊かな感性と手がかりを与えてくれます。どうじにまた、読み手である大人には子どもの遊びの中にかくされているさまざまな面と、その深い意味に気がつくかけを与えてくれます。

このような意味でお薦めしたい作品には

もりのなか

わたしとあそんで

ジルベルトとかぜ

などあります。

☆読むということ。

読むということは、力がいらす。読むというおこないは文字を目でなぞるだけでなく、書いた人とどう対話するかという力がいらす。

読むということばは、文字や

書物だけでなく、自然や、社会、歴史、といったことにもかかわつたり、人の心をよむとか、表情をよむといったことにも使われます。

もちろん、文字を読む機会は多く、この場合はその中に登場する人物たちとの対話であり、共感でもあります。

読むということは、自分の感情や好奇心や体験などすべてを動員してせまつていかななくてはなりません。

その力は、幼児の頃からのことばの体験、昔話や、絵本を耳できき、そうした体験をもとにして自分でする読書へと発展する中でこつこつと養われていくものです。けつしてインスタントには身につくものではないと思います。

その読み取る力を動かし、続けさせているものの動機が好奇心です。

子どもの読書体験でもっとも大切なのは、子どもの好奇心です。好奇心がどのように育つていくかということです。

読書の結果を整理したり、表現することを強く求める傾向のある学校での読書指導や、幼児に本を読んでやつて、子どもに

すぐ理解を求めたり、見返りを期待するような態度は伸び盛りの子どもの好奇心の芽を摘むようなものです。

そうした枠をはめずに、自由に好奇心を働かせるような絵本体験や、読書体験ができれば最高です。

その楽しみは遊びに匹敵するもので、この楽しみを体得できさえすれば読書力と、読書習慣は自然と身につけていくことでしょう。

そのことこそ、読みを深める手がかりとなつていくことと思えます。

それには、まずよい絵本に出会うことと、お母さん、お父さんが心を込めて読んでやり、そして親子で楽しむことによつて子どもも共感をもつことでしょう。このことが子どもの成長に

とつて大きな糧となることだと思えます。

絵本とは、子どもが読むものではなく、読んで聞かせるもの。子どもは絵本を聞くことで、なんで、なんだろう、と好奇心をもち、ものごとに疑問をもつなかで創造するちからも育つていくのだらうとおもいます。

読み聞かせをすること、それも子どもを引っぱるのではなくうしろから、そつと支えてやつてください。

読み聞かせをすることには、ほかに、ことばのこと、また絵本や本の中でする体験、などいろいろと思われることもありますが、それはまた。

市立図書館からくる「はまなす文庫」にも沢山の絵本や子どもたちに読んでほしい本を積んでいるようです。また専門の人もいて相談も出来るようです。

司書のB記

みやづ 女性スポーツフェスティバル'99

浜田 美千代

七月の声を聞き、海山の恋しい季節となりました。

今年もみやづ女性スポーツフェスティバル99が、七月十一日の日曜日宮津市民体育館において華やかに開催されました。

婦人は勿論、お年寄りから、子供達迄今年のテーマでもあります。

あたたかい心で手をつなぎ、うるおいのある町づくりを目指しての大運動会です。

今日一日だけは家の事はお休みして頂き、一人一人がスポーツを通し毎年毎年新しい人との出逢いを大切に気持ちを一つにして色んな競技に、一生懸命、体当たりする姿は選手も、又応援する者もその顔はいきいきと輝いていました。

由良婦人会も総勢約八十名の

開会式での堂々たる入場行進。

その中で皆んなに見守られる様に、今年は私、決してそんな大役を受ける器ではないのですが宮津市旗を持つての行進という大変緊張しましたが、とても、素晴らしい経験をさせて頂きました。

又この大会の実行委員の準備係の一人として微力ながら、他の役員の方の足を引っぱらない様に協力してきました。

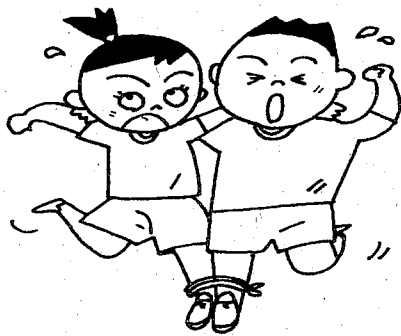
このフェスティバルが無事成功する様願って、当日迄、何回となく役員会を持ち、又それに伴っての、それぞれの準備等毎年この様にして、この会に、携わってこられた方々、本当にご苦労さまでした。

その大変さをよそにこれ迄、のんびり参加して来ました事に

反省しております。

今後もスポーツを通して、他のたくさんの方々と交流を深め、みやづ女性スポーツフェスティバルの輪が広がって行く事を、願ってやみません。

毎日忙しい婦人の生活の中で、ほっとひと息出来る、楽しい、充実した一日の場を与えてくれるという事は、大変大事なことであり、感謝しております。
ご苦労さまでした。



ソフトボール大会に参加して

高田 登紀子
(旧姓 石田)

毎年、お盆の時期に野球とソフトボール大会が開催されることはずっと前から知っていたのですが、女性の私には無縁のものだと思っていました。

我が家では弟達が出場していたので応援は行っていたのですが、それが四年前の夏に町内の役員さんの方から私に声をかけてくださり、それが初めての出場でした。

私は中学時代にソフトボール部に入っていたし、家庭婦人でも少しやっていたので「ピッチャーでお願いします。」と言われ何の戸惑いもなく「はい」と返事したのを覚えています。

その年に一部は優勝、その次の年も優勝、そして今年も優勝してしまいました。決して私が上手なわけでもないのですが、チームで楽しんでソフトボ

ルをしようというみんなの気持ちがあるという結果になったのだと思います。(翌日私の体は筋肉痛のため三日程、歩くのに難をきたしていました。)

私は現在、亀岡に住んでいて、一カ月に一度は父の様子をみに由良に帰ってきていますが、この大会に出て、なつかしい方々に会ったり、話したりできることも毎年の楽しみになっています。今後の大会に際して思うことは、女性の積極的な参加を呼びかけて、より多くの地元の方や帰省された皆さんのコミュニケーションがはかれたらいいのになあと思っております。

最後に大会を運営されていた役員の方々には暑い中本当にご苦労さまでした。

ありがとうございます。

編集後記

暑かった夏も、朝夕めつきり涼しくなつて参りました。

雨上がりの夜は、秋の虫達の合唱が賑やかに耳に飛び込んで来ます。

学校も長い夏休みが終わり、子供達が元気な声を残して学校へと消えて行きます。

地区運動会・敬老会・秋の取り入れも終り、秋祭りの威勢の良い太鼓の音が聞こえて来る日も、もうすぐです。どうか皆様、お体に気を付けられ、お元気で過ごして下さい。

酒田



石仏・由良城跡の大師山(天王山)の丘

訂正とお詫び

「公民館だより」一〇七号の記事のなかで、次の誤りがありました。訂正いたしますとともに、関係者の方々に深くお詫び申し上げます。

◎平成十一年度

由良地区公民館役員名簿のうち
体育部副部長 藤本 守は

柴田 克己が正当

◎遊行 中西夏江

最終行一九九五年五月二十五日は
一九九九年五月二十五日が
正当



